

## 「いわき市勿来地区の津波被害者が実体験を未来に遺すタイムカプセル」事業

### 東日本大震災を経験した人々の生の声を 後世に遺し伝えることで地域防災の意識を高める

時間とともに記憶は薄れていくが、しかし、人はそれに抗うこともできる。東日本を襲った大震災の記憶の風化が叫ばれているなか、被災した住民の生の声や映像を記録し、タイムカプセルとして後世に遺すことで、自然災害に対する防災意識の強化や維持に役立てようとする試みが、福島県いわき市勿来地区において町の復興に取り組む人々の手で行われている。

#### まちづくりを支援する団体から 勿来地区の復興まちづくりの担い手に

まちづくりを支援し、活力ある地域づくりに寄与することを目的に、2006年に設立された「勿来まちづくりサポートセンター」。同センターは歌枕として知られる勿来の関にできた体験学習施設「吹風殿」の利活用事業をいわき市から委託され、雅楽、薪能、文楽などの上演を行ってきたが、2011年の東日本大震災を受け、急遽、津波被災者の支援活動を行うため、「いわき市勿来地区災害ボランティアセンター」を立ち上げた。

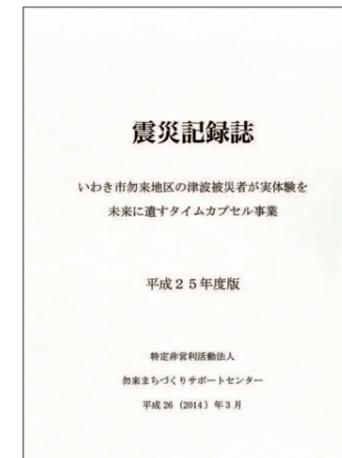
「この地区では、小浜町、岩間町、錦須賀の3エリアで合計248世帯、642名の方が津波により被災をしました。そこで支援を申し出てくださった宇部市役所職員、国際NGOのシャプラニールの方々と一緒に、約50名のス

タッフで、瓦礫の撤去、汚泥の除去、家財の回収などを行うことにしました。4月9日～5月20日まで活動し、その間、約4200名のボランティアのみなさんにご協力いただき、577件の支援要請に対し、521件の処理ができました。この活動を通し、人のネットワークの持つ力、すばらしさといったものを感じました」と、勿来まちづくりサポートセンター理事長の館敬さんは語る。

その後、被災住民が避難所から借り上げ住宅に移り始めたことを契機に、館さんたちは「なこそ復興プロジェクト」を掲げ、約30名のスタッフとともに、支援物資の運搬、訪問、介護の手伝い、専門家を招いての相談会、住民交流のためのサロン運営、双葉町や浪江町などからの原発避難者の支援など、被災者の生活再建支援を始めるとともに、地区の復興計画を中心に、ライブや写真展などのイベント、情報誌作成などを行ってきた。その復興計画の2013年度事業として企画・実施されたのが、「いわき市勿来地区の津波被災者が実体験を未来に遺すタイムカプセル事業」である。これは、岩間町に建設される防災緑地のなかに芸術公園を整備し、その一画に、被災者の証言や映像記録を取めたタイムカプセルをモニュメントとして建設しようというもので、20年後に開封される計画である。



タイムカプセルを取めるモニュメントのイメージベースとその模型



事業の一環としてまとめられた平成25年度版の「震災記録誌」



筑波大学の学生たちが被災者から生の声を聞いた

#### 大震災の被災者の生の声と映像を取めた タイムカプセルを後世に遺すプロジェクト

この事業の背景にあったのは、「震災の記憶が時間の経過とともに薄れていくことに対する危機感」だったという。「このままでは、次に来る震災に対して何も教訓を残せないまま終わってしまう。今回の被災の背景には、おそらく誰もが、どうせ大丈夫だろうと自然をナメていたところもある。その意識を戒め、後世の人々はもちろん、被災後を生きる自分たちに対しても地域防災の大切さや心構えを根づかせるために、被災者の生の声と映像を記録として遺すことにしました」と、館さんは話す。

タイムカプセル事業は、まず、被災者にインタビューし、それを映像や証言集にまとめる作業から始まった。これには被災者支援のボランティアにも駆けつけた筑波大学の学生たちで作る「Tsukuba for 3.11」のメンバーたちが

#### 担当者より



大震災からの復興まちづくりのモデル事業としたい

NPO法人  
勿来まちづくりサポートセンター  
理事長  
館敬さん

今回はご支援くださり、ありがとうございます。この助成がなければ、ここまで計画の進展もなかったと思います。このタイムカプセルモニュメントを契機に、今後、アトリエ村やアート祭などを組み込んだ芸術性のある復興まちづくりにつなげていきたいと思っています。今後も長い目で見守ってくださり、支援の枠組みを継続していただければ幸いです。

あたった。彼らは夏休みや休日を利用し、被災者を一軒一軒訪ね、地震や津波の様子、避難生活の感想、子や孫へのメッセージなどを丁寧に取材した。「すべての被災者の声や映像を集めるのが目標ですが、なかには話したくない、今はまだ話せる状況ではないという方もいらっしゃいますから、簡単にはいきません。これまで約50世帯、100名ぐらいの方々に取材できました。これらをとりあえず、13年度分の「震災記録誌」としてまとめる予定です。こうしたものを見れば、これなら協力したいという被災者もまた現われてくると思います」と、館さん。

さらに、これらの記録を取めるタイムカプセルのモニュメントのデザイン事業を東京藝術大学に依頼した。担当した美術学部が作製したデザインは、卵をモチーフにしたもので、その地下に収納庫を設置し、そこに証言集や映像を取めたUSBメモリーなどが収納されるという。この証言集の編集・制作作業とタイムカプセルモニュメントのデザイン委託に、AJOSCからの助成が活用された。

防災緑地は2016年3月に完成する予定となっているが、それを待ってタイムカプセルは埋設される。20年後の開封時まで、勿来地区の人々や、この事業に携わった人々が高い防災意識を持ち続けることができるかどうかを試されているともいえる。